

◇◆ 1. 高校作文教育研究会（高作研）を終わりにします 中井浩一 ◆◇

高作研を20年以上やってきて、やるべきこと、やれることをやりきったと思います。これが終わりにする最大で根本的な理由です。

高作研は1998年に古宇田栄子さんと私（中井）で設立し、2人の共同代表制によって運営してきました。

古宇田さんは日本作文の会の常任委員でしたが、高校段階の教員としては彼女一人。

私にとっては、高校段階の全国の実践家、理論家と交流し、自分の実践を見つめ直し、学べることをどん欲に学びたかった。そのためのパートナーとしては、「日本作文の会」（日作）を選んでいました。日作には、日常生活を根拠にする、写実主義、社会主義を背景に持つ、などで私の立場に近かったからです。

しかし、古宇田さんと私、日作と高作研には違いもまた最初からありました。日作には、「ありのまま」の生活を根源とするという明確な立場がある一方で、そこに閉じこもるという経験至上主義的な傾向がありました。

私は、本来は「ありのまま」の生活経験を根拠にしながら、それを徹底的に客観化、一般化・普遍化することでその経験の本当の意味（「あるべき姿」）を明らかにする必要がある、と考えます。

こうした対立があるので、表現指導の指導過程を、第一段階の自分史、自分の生活経験文、第2段階の調査、聞き書き、第3段階の総合として捉えた時、第1段階から第2段階の聞き書きまでが古宇田さんと一緒にやれることであり、またその最大の可能性が第2段階の聞き書きでした。だから「聞き書き」の共同研究を徹底的に行い、大きな成果をあげられたし、それを『「聞き書き」の力』という本にまとめ刊行することができました。

最初の出会いから20年、ここに最初からあった高作研の可能性のほぼ全てが実現したと思います。その先の第3段階では、古宇田さんと私がともに歩むことはできませんでした。その先は、私は鶏鳴学園と中井ゼミ（大学生と社会人）ですでに実践と理論を積み重ねてきましたし、今後もそうします。

この20年の経緯については、すでにこの機関誌38号（2018年8月1日発行）に文章「高校作文教育研究会の20年、私の表現指導の30年」を発表しています。それを今回も掲載させてもらいます。ここにすべてが書かれていると思います。さらに今、書き加えることはありません。ただ1つ、「その後」を補うと、2018年夏の日作の全国大会でも高作研が高校分科会を担当したのですが、そこで決定的な対立が起きました。その結果、2019年の5月に古宇田栄子さんは退会しました。この文章の「6. 新しい出発」ではまだ先に可能性があるように書いていますが、実際はそうではなかったということです。

古宇田さんとは20年、一緒にこの会を運営してきました。よく喧嘩もしましたが、暴れん坊の私をよく支えてくれたと思います。彼女は大学で日作の中学段階のリーダーである太田昭臣さんの指導を受け、その後県立高校の教員となってからも日作の中で活動してきました。彼女は日作の「模範生」のような面があります。研究会での彼女の司会は常に安定していて、一人一人の報告者を暖かく包み込み、議論が混乱しても、低調でも、最後はそれなりのまとめ方で終わらせて、感心していました。その安定感とそれを支える彼女の努力や誠意は、『「聞き書き」の力』のもとになった『月刊国語教育』の連載「聞き書きの魅力と指導法」を2年ほど続けられたところにもよく出ています。これは研究会の共同討議の内容を録音からまとめ直したもので、貴重な記録になっていると思います。

しかし彼女には日作の「模範生」であることを壊すことはできませんでした。日作の理論や実践を根底から疑ったり、問題提起をしたり、それに代案を出すことはありませんでした。ただし、その枠内においては、私たち高作研の成長、発展のために尽力してくれました。日作の全国大会の終了後に「生活綴方の旅」をする発案は古宇田さんのものでした。またこの20年、高作研の会計をひとり務めてくれたのも古宇田さんです。その縁の下の力持ち的な仕事には彼女の特質が良く出ていたと思います。この20年の尽力にとっても感謝しています。

こうした会には対立や分裂がつきものですが、私も古宇田さんも、それを決してしようとはしませんでした。この会が貴重で重要なものであり、私たちは何としても前に歩み続けなければならないことでは、二人は強く一致していました。しかし日作と高作研との対立が決定的になった時、ついに終わる時が来ました。

この数年は、私のライフワークである哲学の仕事に専念する必要があり、高作研の運営には手が回らないという事情がありました。しかし、それが高作研を終わりにする本当の理由ではありません。高作研はその使命を終えたのだと思います。

若い人に、私たちの成果を継承してほしいと思いますが、それを担う人たちは、次の世代の中から必ず現れることでしょう。

私は、表現指導を止めることはありません。これは哲学とともに、私のライフワークの一つですから。その実践報告は今後も公開の場で続けます。

高作研 代表 中井 浩一